

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫



◆◆◆ No.0796 ◆◆◆

24/07/03

【 7 月ドル/円も引き続き「大相場」を期待 】

月末にかけ、ドル/円が 38 年ぶりとなる 161 円台を示現した 6 月相場。その月間変動は 6.73 円 (154.55-161.28 円) だった。かつての「月間変動 8 円」には及ばないが、それでもなかなか大きな変動だったことは間違いない。

そんな 6 月相場を受けた、足もと 7 月相場は内外市場ともサマーバカンス入りする向きが多く、参加者が一時的に減少するため「動くか動かないか比較的極端な値動きをたどることが多い」——ことが経験則として知られている。先月の動きなどを勘案すると、今月も同様の大きく動くことを期待したいところだが果たして如何に。

◎注目材料も多い、とくに世界的な政治事件が波乱要因に!?

恒例となっている月間の見通しを指摘する前に、まず過去の 7 月ドル/円相場星取表をみると、1990 年以降昨年までの 34 年間で実に 17 勝 17 敗。まったくの五分で、方向性的にはどちらが有利ということはないようだ。

米国などは「サマーラリー」、日本でも「七夕天井」——と日米ともに、7 月の株式市場は上昇傾向が優勢とされているものの、為替市場は一線を画す結果。上下どちらに振れてもおかしくなく、ニュートラルな姿勢で取引にまずは臨みたい。

とは言え、そんな 7 月のドル/円相場を、別の観点から見た場合、ひとつ興味深い事象がうかがえる。それは参加者が徐々にサマーバカンス入りするため流動性が乏しくなることもあってか、過去の 7 月相場は「動くか動かないか比較的極端な値動きをたどることが多い」——ということだろう。

もちろん動かないパターンも決して少なくはないが、ここ最近では逆に「動く 7 月相場」のパターンが優勢となっている感がある。たとえば、昨 2023 年の月間変動は 7.66 円で、これは年間 4 位にランクイン。また、その前年 2022 年は、年間 9 位にとどまったものの、月間変動そのものは 6.88 円となかなかの変動を記録している。これからすると、月間を通して「動かない」という一カ月に終わったとしても、5-6 円ほどの変動は期待できるのかもしれない。

なお、仮に月間変動が仮に 5 円だった場合、今月の取引開始レベル 160.75 円を参考にマックスでドル高に振れると、165-166 円まで達する可能性もあることになる。逆に、月間を通してドル安へと振れると 155 円近くまで下落する展開もありそうだ。

私事になるが、筆者が大学を卒業し、金融業界に入ったのが 1990 年。その年の 4 月にドル/円は高値 160.20 円をつけているため、160 円というレベルまでは遠い昔にかつて一度体験しているけれど、本稿執筆時に推移している 161 円以上は筆者でさえも完全に未体験のゾーンだ。よって、あまり値ごろ感がなく、165 円や 170 円と言われても未知の領域で正直あまりピンとこない。果たして、どこでドルは天井を付けるのか、筆者も毎日興味深くマーケットを注視しておきたいと思う。

一方、ニュースの観点から過去の 7 月を見ると、ひとつ興味深いのが為替あるいは金融に関する重要な事象が決して少なくないこと。幾つか例を挙げると、「米国の通貨が『ドル』に決定 (1785 年)」や「NZ 外為市場閉鎖 (1984 年)」、「リラ暴落でイタリア市場が一時閉鎖 (1985 年)」、「アジア通貨危機がはじまる (1997 年)」——などとなる。

また金融関係以外でも、別に「米国が英国からの独立を宣言 (1776 年)」や「ウォーターゲート事件でニクソン大統領の弾劾可決 (1974 年)」、「ロッキード事件で田中前首相逮捕 (1976 年)」など、歴史的に重要な出来事が相次いでいた。

もちろん、こうしたことは毎年確実に起こるということではないものの、ここ最近の世界情勢を振り返ってみると気に掛かるものは幾つかある。

前者でいえば、改めて指摘するまでもなく円全面安の様相を呈するなか、6 月 30 日には世界各国の中央銀行が参加する国際決済銀行 (BIS) が、公表した経済報告書で「とくに円に対してドル高が顕著になっている」との認識を示したことが気に掛かる。色々とネガティブファクターも取り沙汰されている日本政府・財

